埼玉大学紀要（教養学部）第52巻第１号　2016年

鉄器と紡錘車からみた原三国時代前期辰韓・弁韓社会

Iron Implements and Spindle Whorls of Jinhan and Benhan Society in the Early Proto Three Kingdoms Period

坂野和信※　坂野千登勢※※

Masanobu BANNO　　Chitose BANNO

Ⅰ　はじめに

嶺南地域の原三国時代時代前期前半の鉄器・青銅器類には中国前漢の法量と重量規格である度と衡という統一された金属器生産規格が存在し、手工業製品の生産に導入されたこと、また、弥生時代中期後半の北部九州が、辰韓首長層に対して行った倭製武器形青銅製儀器の贈与は、互恵関係に発展しなかったことについて考察した。

また、原三国時代前期中葉の特徴として、辰韓・弁韓二つの地域を代表する歴史的に突出した首長墳墓が成立したことから、韓半島南部の鉄資源を掌握し、楽浪郡や倭との鉄を軸とした交易ネットワークを通して最上位の階層を形成したことを論じた[1]。

原三国時代前期から両地域において、紡錘車の副葬から布生産が行われ、鉄製品と同様に重要な交易品とされていたことが考えられる。本稿では、原三国時代前期中葉以降を中心に鉄器や紡錘車から、拮抗する辰韓・弁韓両地域勢力の間で交易の中心地が移動すること、板状鉄斧が実用品から、蓄財及び富の象徴へと変化したことを考察したい。

原三国時代前期後半の様相から、原三国時代中期以降、更に三国時代の韓半島の両地域の構図を描くことが可能であるといえる。

Ⅱ　鉄器普及社会と画期

嶺南地域では、原三国時代前期後半に多様な手工業生産部門の変化が認められる。まず、紡織技術専業化の萌芽期として位置づけることができる。次に、大型鉄器の特化と鋳造鉄斧の多様化、及び地域差が現れ、弁韓にも独自の鋳造鉄斧が成立する点である。

そして、前期後葉には副葬された鉄器組成から、被葬者の職能との関係をみることができる。また、副葬の状況から、板状鉄斧の二つの性格が認められる。被葬者の職能を反映する墳墓群と、職能との関係ではなく、板状鉄斧を棺床の如く敷並べ財力・蓄財としての象徴的性格を端的に示す墳墓群である。

墳墓群への大型鉄器副葬の様相によって、原三国時代前期後半には、交易の中心地や鉄器生産拠点が辰韓と弁韓の間で移動したことが指摘できる。

1. 前期後半の社会構成

原三国時代前期の時期区分は土器型式から、前期前葉（BC110 ～70）、大楽浪郡成立との関係から中葉（BC70 ～50）、後葉（BC50 ～10）、原三国時代中期に繋がる終末（BC10 ～AD10）の併せて４期に区分できる。また、原三国時代前期は前半、及び中葉以降を含む後半に大きく二分できる。

＊　ばんの・まさのぶ
元埼玉大学教養学部非常勤講師
＊＊ ばんの・ちとせ
埼玉大学教養学部非常勤講師

時期的に相互に重なる部分もあるが、さらに、原三国時代前期後葉の墳墓は土器型式から、後葉１期・２期に墳墓の変遷を細分することが可能である。

後葉１期（B.C.50~30 頃）は、校洞遺跡 17 号・同５号・同 13 号・同 11 号・茶戸里 38 号墳の５基等、後葉２期（B.C.30~10 頃）は、校洞 10 号・同 18 号・同 21 号・同９号・同 20 号墳の５基である。これに後葉２期には剣把附鉄剣等の鉄器類が多く副葬された、隍城洞江辺路３号墳を挙げる（第１図）。

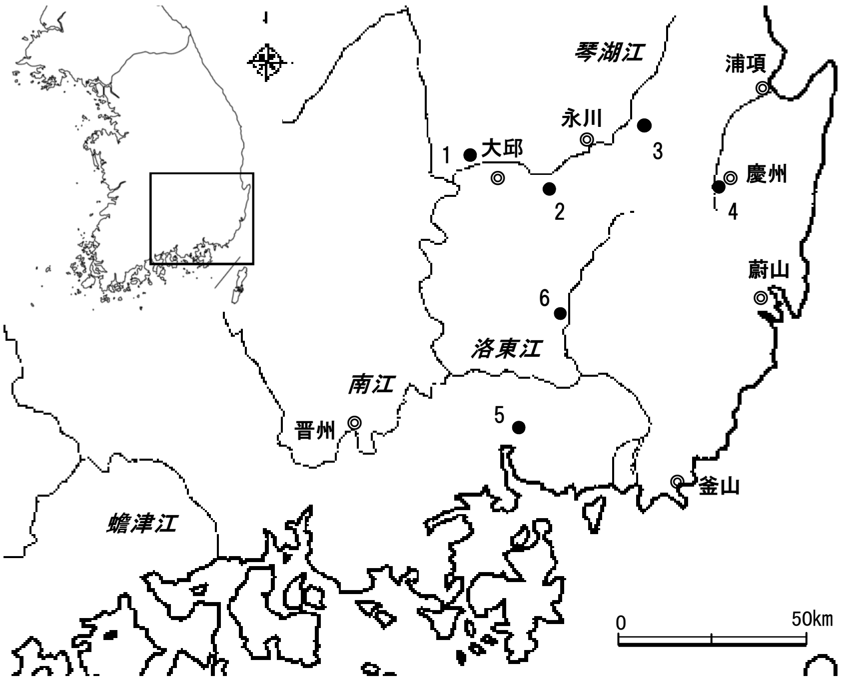
弁韓の原三国時代前期後半に副葬が増加する鋳造鉄斧・鍛造鉄斧の形態の差異から、辰韓と弁韓の特徴と地域差の拡大について述べたい。

(1)　紡錘車副葬と被葬者

原三国時代前期後半には副葬品から交易品として、鉄製品の他に織布が推定できる。

後葉１期の校洞遺跡 17 号墳には、棺内に異体字銘帯鏡１面、紡錘車４点、耳栓２点が副葬され、棺外に法量の大きい巾着形壺 C1 類、灰陶系短頚壺 C 類・筒形甕 B 類、及び墓壙上部に把手附長胴壺 A 類が供献されている（第２図 1）。この墳墓の特徴は、農工具・武器等、鉄器類の副葬が一切みられないことである。

異体字銘帯鏡（昭明鏡）は、原三国時代前期中葉のⅢ式・漢鏡３期（後藤 2009）[2]に分類されている。この漢鏡は、面径 10.1 ㎝・4.3 寸、（1 尺 23.49 ㎝）である。朝陽洞 38 号墳の異体字銘帯鏡４面の１尺平均値は 23.47 ㎝である[3]。両者の尺度の差は、計測誤差の範囲内であり、ほぼ一致する尺度である。17 号墳の異体字銘帯鏡（昭明鏡）は、北部九州の甕棺墓の出土例からみて漢鏡３期[4]であり、弥生中期前半に遡る事例は 13 例の中で１点もみられない。このうち８例は、弥生中期後半である[5]。また、韓半島南部の



第1図　韓半島南東部 関連遺跡
1:大邱八達洞遺跡 2:慶山林堂洞遺跡　3: 龍田里遺跡 4: 慶州朝陽洞遺跡･隍城洞遺跡
5:義昌茶戸里遺跡　6: 密陽校洞遺跡

墳墓では、原三国時代前期前葉[6]に集中することが明らかである。即ち、校洞 17 号墳の異体字銘帯鏡は、原三国時代前期中葉を遡ることはないといえよう。

次に、校洞 17 号墳にも紡錘車 4 点が副葬されている（第 2 図 1①～④）。円盤形 1 点は直径 4.1 ㎝・重量 14g、小型円盤形②～④の 3 点は、直径 2.5～2.7 ㎝・重量 8g と、小型のものはほぼ一定の法量である。小型円盤形紡錘車 3 点は軽量であるが、不整円形の耳栓⑤重量 4g・⑥重量 6g と比較するとやや重く、焼成も良好で硬く円盤形紡錘車①と同様の焼成②～④である点が共通する。これらの紡錘車は、織布用として紡ぐ糸の太さの違いを明瞭に示している。また、校洞 5 号墳にも武器の副葬はなく、小型板状鉄器片と紡錘車各 1 点、及び低脚高坏、巾着形壺 C 類の副葬がみられる（第 2 図 2）。紡錘車は直径 3.2 ㎝・重量 14g と軽量である。5 号墳の時期は、17 号墳と同様の巾着形壺 C1 類によって、同時期であると考えられる。

校洞 17 号墳の漢鏡と紡錘車を組合せる複合的といえる副葬は、織布生産に関係が深い上位階層の女性の被葬者を表徴する副葬品の可能性が高い。また、5 号墳の被葬者は、17 号墳被葬者より下位ではあるが、やはり上層に位置する人物であったと推定できる。

紡錘車の法量と重量が異なる組合せわせは、紡ぐ糸の太さの差異の現れであり、糸の太さと生産される織布との緊密な関係が指摘されている[7]。つまり織布は、原三国時代前期後半には、一定の等価価値をもつ交易品として位置づけられる点が重要である。そして、富の象徴となった織布は、鉄器等と共に主要な手工業品として流通し、交易されていた可能性が高い。それ故、織糸の太さを組合わせる紡錘車が漢鏡と共に、富の表徴として副葬されたと考えられる。

原三国時代前期初頭の林堂洞造永 1B 地区 7 号墳の副葬品にも小型紡錘車 1 点、直径 2.6 ㎝、茶戸里 44 号墳にも 1 点、直径 2.9 ㎝が認められることから、嶺南地域では原三国時代成立期に遡って、早くから織布が交易品として流通していたと推定できる。また、原三国時代前期中葉において、韓半島南部で最多の鉄器が副葬された永川龍田里墳墓（第 1 図）にも円盤形と算盤玉形各 1 点が供献されている。原三国時代前期中葉における織布と鉄器の生産・交易活動が社会基盤形成に大きな影響を与えたと考えられる。

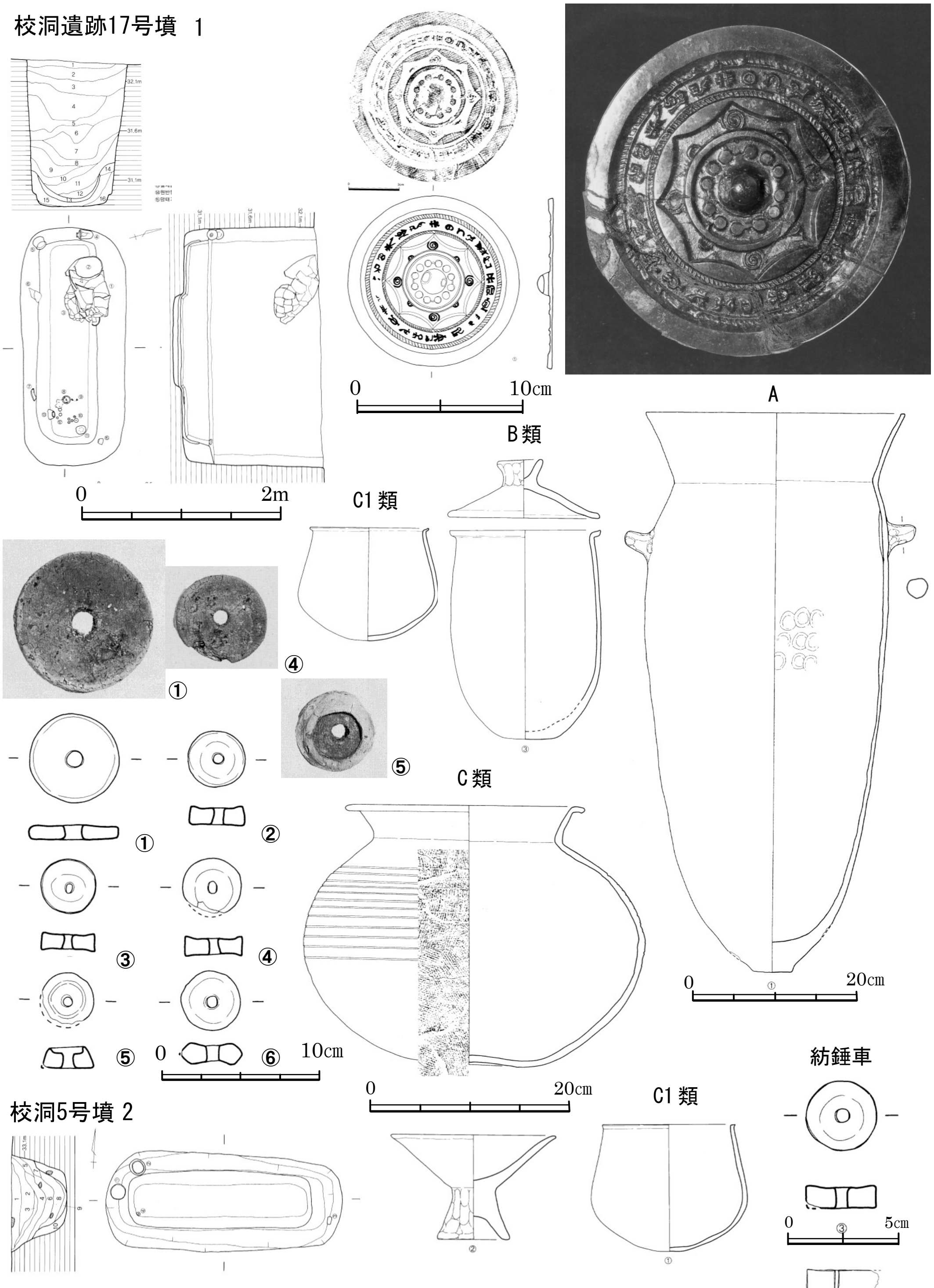
(2) 紡織技術の専業化

校洞 13 号墳には、鉄器と紡錘車及び瓦質土器の副葬がみられ、鉄器副葬は A-2 ランク（表 1）である。青銅製品は、銅剣と形骸化した把頭飾・剣盤部各 1 点である。鋳造鉄斧は刃部幅が広い Ca（第 4 図凡例）類である。瓦質土器は、校洞 17 号墳と同様に口径が大きく円底の

表 1　鉄器副葬のランク

ランク			内訳
A	大型鉄器2点以上、基本的には小型鉄器を伴う	A－1	大型鉄器10点以上
		A－2	大型鉄器10点未満3点以上
		A－3	大型鉄器2点以上
B	小型鉄器を中心とした副葬	B－1	大型鉄器1点と小型鉄器
		B－2	小型鉄器のみ

*手工業分野の鉄器を中心とするため、農具と考えられるタビは大型鉄器としてカウントしない



第2図. 前期後葉1の墳墓と副葬品(1) 1:校洞遺跡17号墳,2:校洞5号墳

巾着形壺C1類・直口壺C類と灰陶系短頚壺の前期以来の製作技法を継承し、辰韓地域を主体とする器種タイプB類である(第3図3)。

校洞13号墳では、紡錘車3点の副葬が注目される。上記した校洞17号墳には、大小の紡錘車の組合せが認められた。しかし、大型鉄器と小型鉄器の組合せ、及び青銅器類の副葬が認められる校洞13号墳の円盤形紡錘車3点は、2.5~2.7㎝・重量10gで、一定の法量と重量をもつ一種類の紡錘車のみで構成され、17号墳と異なる。

加えて、慶山林堂A-Ⅰ地区148号墳には、紡錘車2点の副葬が認められる。この墳墓の大型の鉄器はタビ、小型鉄器は、鍛造鉄斧3点・鎌・環頭刀子各1点とB-2ランクである(第3図4)。紡錘車は算盤玉形と円盤形、直径4.0㎝・3.2㎝の2点であり、計測されていないが、重量は異なるとみられる。この墳墓の時期は、牛角形把手壺A類・巾着形壺D類から、原三国時代前期後葉1期B.C.50~30)に位置づけられる。

紡錘車は多数の鉄器を所有する原三国時代前期中葉の永川龍田里墳墓で2点、鉄器副葬A-1ランクの慶州朝陽洞38号墳でも1点の紡錘車と、原三国時代前期中葉以降、織布が交易品あるいは交換財とされ、その価値を徐々に高めていったと考えられる。また、原三国時代前期終末期から中期初頭には、手工業生産分野における紡織技術専業化と社会的画期が存在したことが指摘されている[8]。

原三国時代前期後半は、紡織専業化の萌芽期として位置づけることができよう。

2. 鋳造鉄斧の多様化と地域差

原三国時代前期後半には、慶州地域にも新たな鋳造鉄斧の形態の成立をみることができる。また、弁韓においては密陽で銎部・刃部突帯のない形態、及び昌原地域で、前期前半の系譜が認められる鋳造鉄斧の成立が認められ、鋳造鉄斧において小地域間の差も現れる。

(1) 鋳造鉄斧分類と地域的特徴

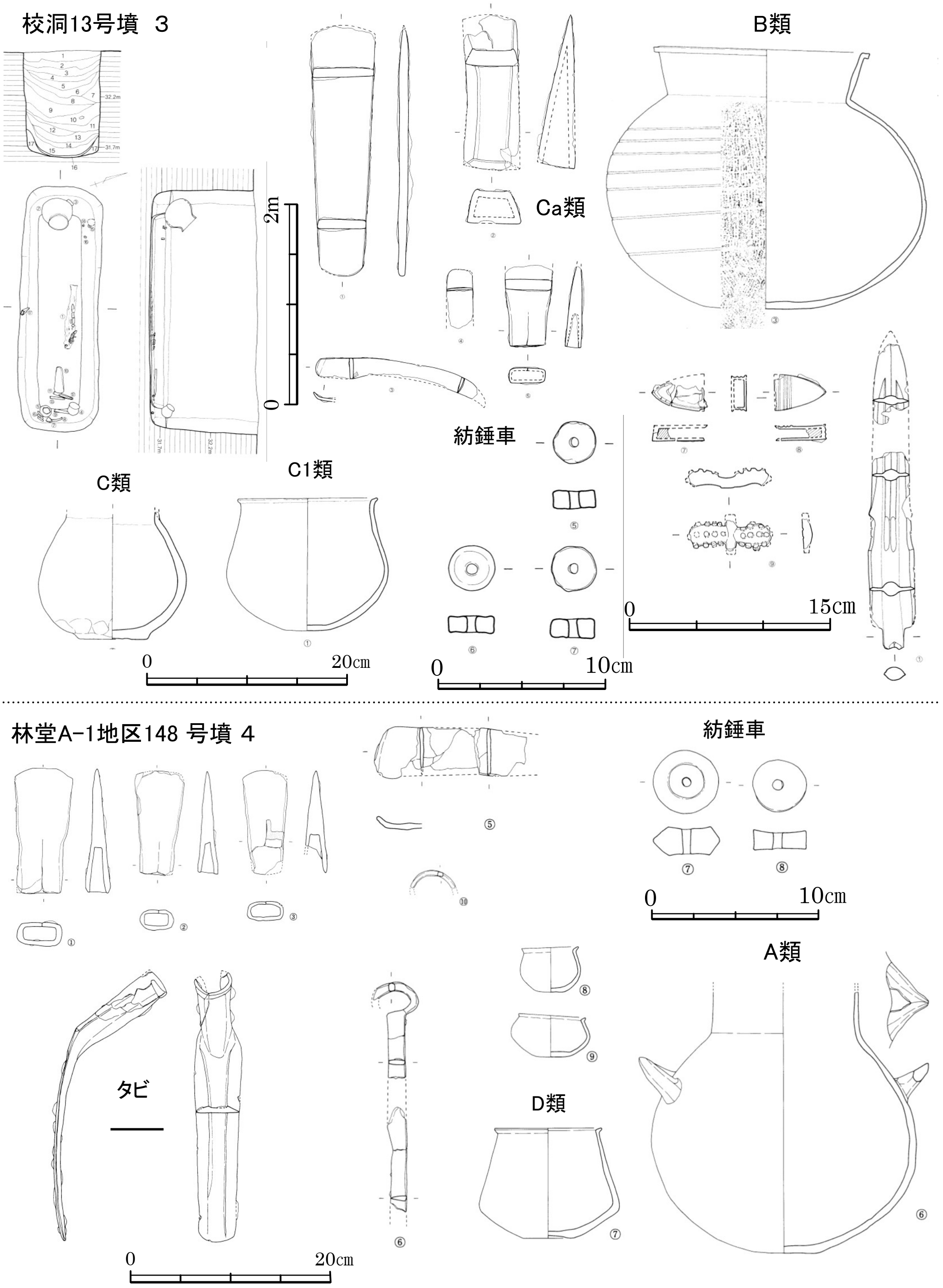
原三国時代前期後葉に辰韓と弁韓には、独自の形態の鋳造鉄斧が認められる。既に、原三国時代前期前葉と中葉の鋳造鉄斧分類を示した[9]。断面長方形(A類)、低台形(B類)、突帯形(C類)に加え、後葉~終末期に成立する新たなタイプとして高さのある台形(D類)の鋳造鉄斧の分類を加えて検討する(第4図凡例参照)。これらの分類手法は、鍛造鉄斧も共通であるが、紙幅の都合で省略する。

主な河川流域毎に、鋳造鉄斧の地域的特徴とまとまりを把握し、簡略に説明する。土器型式から鋳造鉄斧の時期設定を行っている。

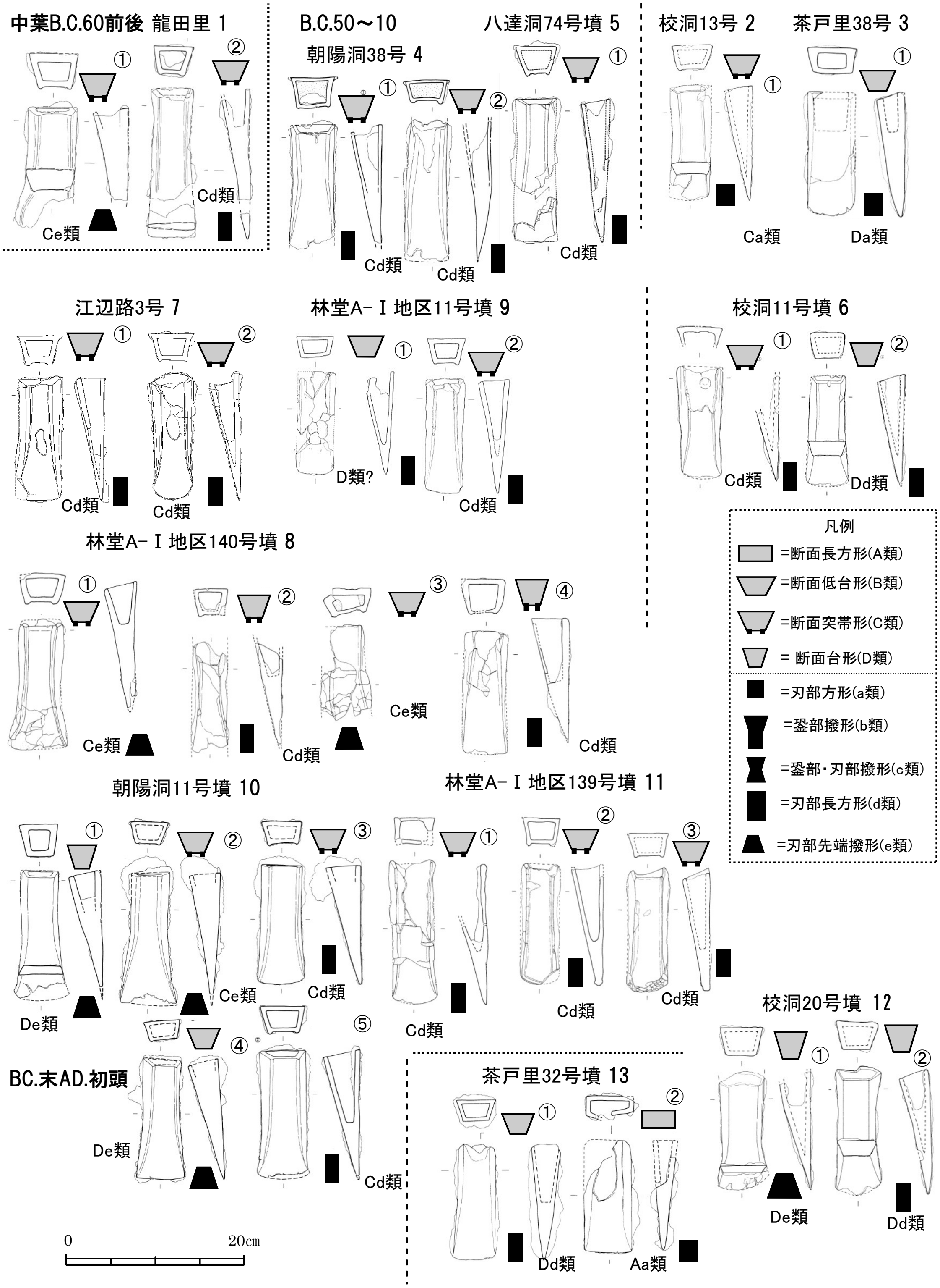
琴湖江上流域

永川龍田里墳墓では、刃部が撥状に開くBe・Ce類と、刃部が細長く造られるCd類の3つのデザインをもつ形態が新たに登場した[10]。Be類は、前期前葉の銎部低台形B類の系譜を継承しつつ、刃部が撥状に発達するタイプである。Ce・Cd類も同様に銎部は先行型式を踏襲し、Ce類は刃部が撥状に発達するタイプであり、Cd類は刃部が長く狭いタイプである。これらのうち、Be類は継続性がみられないため、一過性のものとみられる(第4図1①・②)。したがって、琴湖江上流域では鋳造鉄斧Ce類・Cd類という、主として2つのタイプが原三国時代前期中葉に成立したと指摘できる。

この鋳造鉄斧の影響が同じ流域の慶山林堂墳墓群にみられ、林堂A-Ⅰ地区139号Cd(第4図11①・②・③)、同140号墳にはCe・Cd類(第4図8①・③、②・④)、同11号墳Cd類(第4図9②)が認められる。また、八達洞74号墳にもCd(第4図5①)がみられる。琴湖江流域では、鋳造鉄斧Cd類の占める割合が高い。このように、原三国時代前期後半には、慶州地域に



第3図. 前期後葉1の墳墓と副葬品(2) 3：校洞遺跡13号墳, 4：林堂遺跡A-1地区148号墳



第4図. 原三国時代前期中葉～後葉 鋳造鉄斧類型と時期区分

も新たな鋳造鉄斧としてCd・Ce類という形態の成立をみることができる。

兄山江流域

この流域でも琴湖江流域の鋳造鉄斧Cd類の系譜が継承され、朝陽洞38号墳の鋳造鉄斧3点は、何れもCd類で銎部・刃部幅が狭く、細長い造りである（第4図4①・②）。隍城洞江辺路3号墳にもCd類がみられる（第4図7①・②）。また、若干時期が降る朝陽洞11号墳には、刃部幅が狭く先端が撥状に開くCe類、及び銎部が高く刃部突帯が造られない弁韓系De類が、新たに認められる（第4図10①~⑤）。

密陽江流域

校洞墳墓群には、鋳造鉄斧D類が比較的多く認められることが特徴といえる。同11号墳にはCd・Dd類（第4図6①・②）、同13号墳Ca・Cd類（第4図2①）・同20号墳にDe・Dd類（第4図12類①・②）がみられる。

校洞11号墳の鉄器副葬はA-2ランクで、大型鉄器は、板状鉄斧・鉄矛・鉄剣各1点・鋳造鉄斧2点、小型鉄器は鍛造鉄斧と鎌である。瓦質土器は底部が薄い平底の巾着形壺D1類で琴湖江流域と比較して法量が大きく、底部が薄い点が異なる（第5図5）。校洞11号墳の鋳造鉄斧1点には銎部破砕がみられる。

洛東江流域

茶戸里38号墳の鉄器副葬はA-3ランクで、大型鉄器は鋳造鉄斧・鉄矛各1点とタビ1点、小型鉄器は、矛・剣・鉋各1点である（第5図6）。鋳造鉄斧は刃部幅が広いDa類であり、銎部・刃部突帯が造られない弁韓タイプである。巾着形壺C1類は、校洞13号墳のC1類（第3図3）と同一型式である。

洛東江流域の原三国時代前期後葉に登場するタイプはDa類で、茶戸里38号墳の鋳造鉄斧が典型である（第4図3①）。D類は銎部が高く幅が広いことが特徴である。また、原三国時代前期終末の同32号墳には、古式のタイプより刃部幅は狭くなるが、古式の銎部と刃部を継承するAa類と、新しいタイプのDd類（第4図13②・①）が併存している。

弁韓蜜陽江流域の校洞13号墳にはCa類（第3図3）、同11号墳ではCd・Dd類（第5図5）、洛東江流域の茶戸里38号墳でDa類（第4図3）が認められる。刃部幅が広い原三国時代前期前半の伝統を継承するCa類と、弁韓においても新たなDa・Dd類の成立が認められることが特徴である。新形態のDa類は、従来の伝統の刃部幅広の系統であるが、銎部・刃部突帯を省略したタイプであり、Dd類も同様に突帯を省略して、縦長に刃部を造る弁韓独自の形態の成立である。このように、原三国時代前期後半には、鋳造鉄斧の多様化と地域差が認められ、弁韓独自の鋳造鉄斧が成立したことが指摘できる。

即ち、朝陽洞38号・11号墳と校洞13・11号・茶戸里38号墳の鋳造鉄斧形態の差異は、慶州（辰韓）と密陽・昌原（弁韓）での鉄器製作集団の差異、及び辰韓・弁韓地域の独自性の現れに繋がると考えられる。

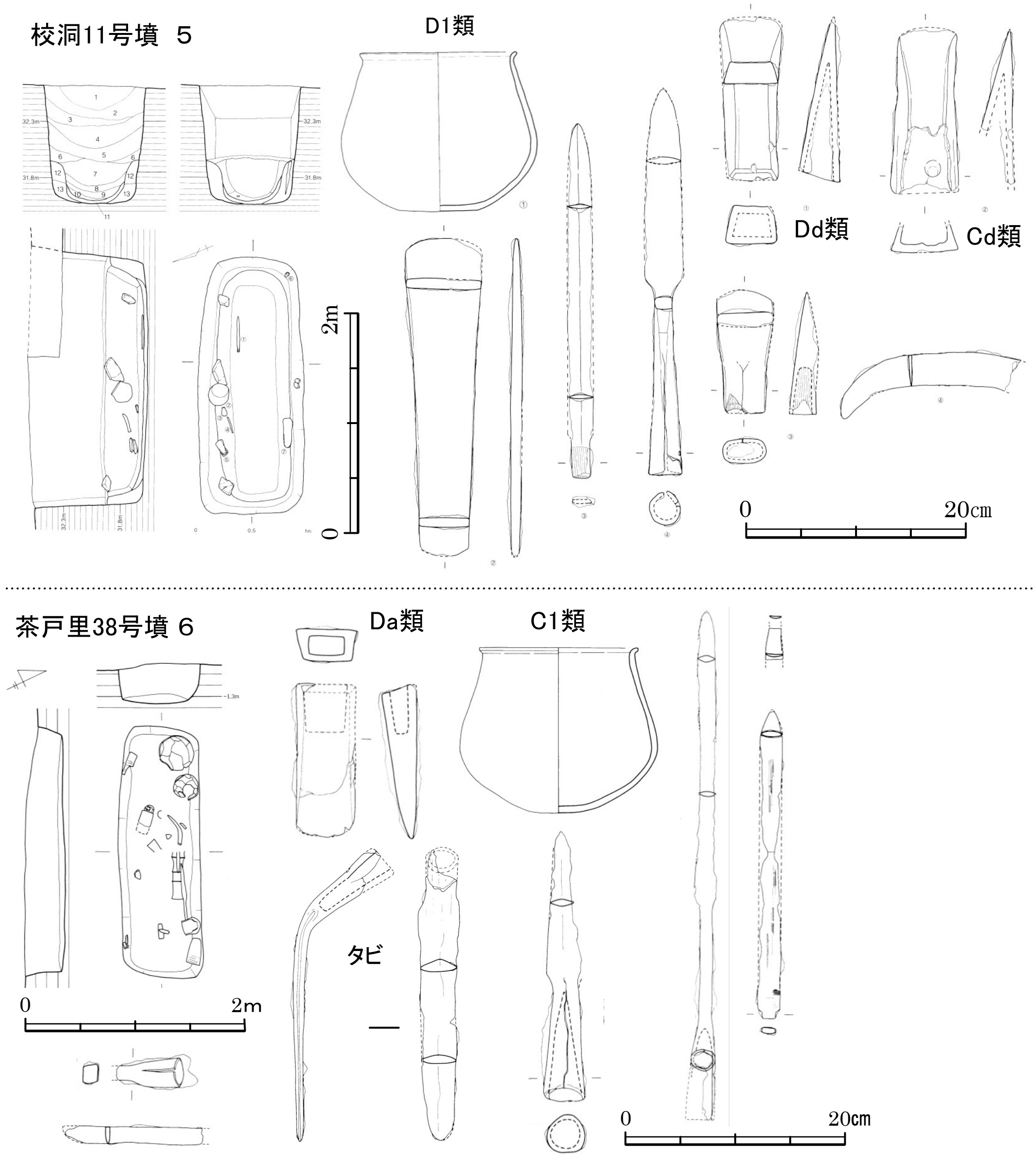
以上、原三国時代前期後葉には、辰韓慶州地域と弁韓密陽・昌原地域の鋳造鉄斧に、地域的差異が顕在化し始めた時代といえる。その時期は、土器型式の特徴から、紀元前1世紀中頃以降で、後葉1期頃（3/4分期）に位置づけることができる。

(2) 大型農具の登場と地域色

原三国時代前期中葉には、大型農具としてタビが弁韓と辰韓に成立するが、当初から地域差が認められる。

大型タビは、茶戸里1号・同38号墳と、林堂A-Ⅰ地区148号墳・同A-Ⅰ地区96号墳に各1点副葬されている。

最も遺存状態の良いものが、辰韓林堂A-Ⅰ地区148号墳のタビである。全長27.4㎝・高さ11.4㎝、刃部断面低台形で、中央部に二条突帯



第5図 前期後葉1の墳墓と副葬品(3) 5：校洞遺跡11号墳，6：茶戸里38号墳

が造られることが特徴である(第 3 図 4・第 6 図 4)。この刃部突帯の間は若干薄く凹部を呈し、突帯から両側に斜めに刃部側縁が造られる。そのため刃部幅が広く基部 4.7 ㎝、先端部 3.6 ㎝で丸く造られる。銎部は高く、その基部は銅矛の節帯と同様に補強が施される。このように、タビにも琴湖江流域独自のデザインが成立し、完成度の高い鍛造製品である。

次に、最古式の一つとみられる弁韓茶戸里 1 号墳のタビは、全長 24.3 ㎝、高さ 7.6 ㎝、刃部断面低三角形、中央部に鎬が施される若干細身の造りで、刃部先端が尖る。この墳墓では大型 3 点・小型 1 点、併せて 4 点のタビが出土している。写真で示したタビ(第 6 図 2)は全長 26.2 ㎝、刃部幅も広く中央に明瞭な鎬を造り、断面三角形の単純構造である。小型ものは残存長

14.5㎝、刃部幅約4㎝を測る。

原三国時代前期後葉の茶戸里 38 号墳のタビ(図面 6-5)は、全長 26.7㎝、高さ 9.3㎝である。同 1 号墳の細身のタビと比較すると両者には、刃部・銎部の造りにも共通点が多くみられる。刃部形状は同じであるが、後者は厚く造られる点が大きく異なる。このように、辰韓琴湖江流域と弁韓洛東江下流域の両者のタビには、独自の形態が成立している。

3. 前期後半の鉄器と職能

原三国時代前期後半における変化は、墳墓への大型・小型鉄器の副葬内容と被葬者の職能との間に一定の相関関係が推測でき、簡略に説明する。また、鉄戈の機能が形骸化し、新しい型式がみられるため、その変化とさらに度量衡との関係から量器の副葬について、若干検討を試みる。

(1) 大型鉄器の特化と量器の副葬

原三国時代前期後葉 2 期(B.C.30~10 頃)の校洞 10 号・同 18 号、隍城洞江辺路 3 号、校洞 21 号・同 9 号・同 20 号墳の 6 基を挙げて、後期後葉の副葬品の変化と大型鉄器の特化について述べる。

後半 2 期の校洞 10 号墳の鉄器副葬は A-2 ランクで、鉄矛 2 点・板状鉄斧 2 点・鍛造鉄斧 1 点板状鉄斧 2 点、鉄矛・鉄剣・鉄戈・板状鉄器・鉋・鑿・細鎌各 1 点である(第 7 図 7)。

校洞 10 号墳の鉄戈は、朝陽洞 5 号墳、永川龍田里遺跡・茶戸里 1 号墳と比較して、極細身で刃部が薄く、胡は拡がらないタイプで短く、茎も極細い造りである。関部双孔はあるが新しいタイプで、大きな型式変化が認められる。鉄戈の変化は、武器としての機能の形骸化過程である。①前期前葉の朝陽洞 5 号墳→②前期中葉の龍田里→③茶戸里 1 号墳→④前期後葉 1 期→⑤後葉 2 期校洞 10 号墳へと順次変遷して、嶺南地域では原三国時代前期終末に消滅する鉄器と考えられる。また、板状鉄斧には、刃部先端が二叉に分かれるタイプも存在し、大型鉄器の特化が認められる。

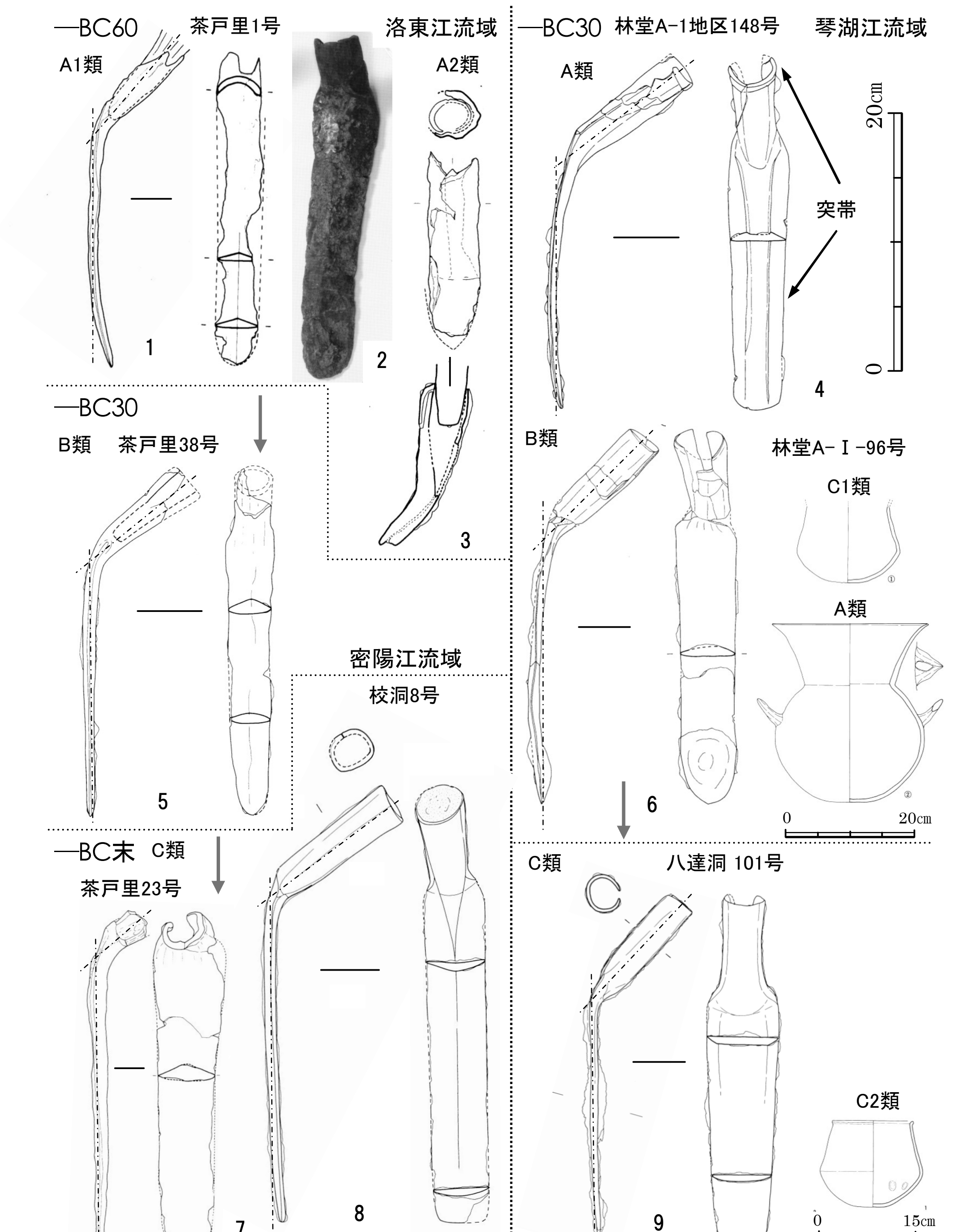
校洞 10 号墳の土器類は棺外から巾着形壺 C1 類、墓壙内から棒状把手長胴甕 A 類が出土している。長胴甕 A 類は、木棺を土砂で充填して被覆した直後の段階に供献されており、葬送儀礼の過程を推定することができる(第 7 図 7)。棺内の副葬品との時期差はほとんどないと判断できるため、これ以外の校洞墳墓群についても同様と考えられる。

校洞 18 号墳の鉄器副葬は A-3 ランクで、大型鍛造鉄斧 1 点、鍛造鉄斧 2 点、鑿・鉋各 1 点である。瓦質土器は円筒形土器(量器)と、法量の小さい巾着形壺 C2 類・高坏、及び灰陶系短頚壺 A2 類がみられる(第 7 図 8)。

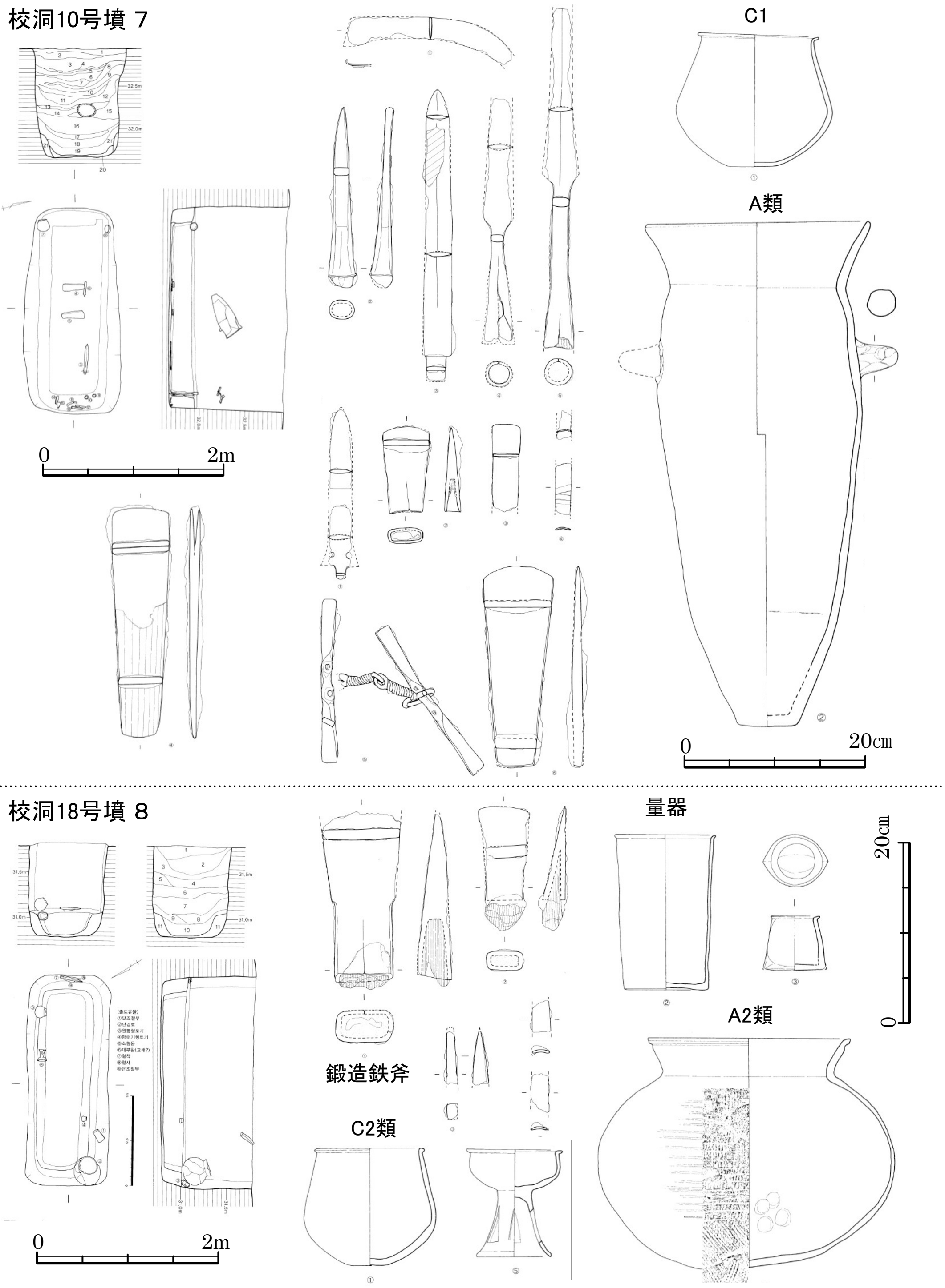
校洞 18 号墳の特徴の一つは、特化した大型鉄斧が副葬されることである。刃部先端に刃こぼれも認められるが、最大の法量と重量で、残存長 19.5 ㎝、推定 20 ㎝・8.5 寸、重量現状 1,268(1,300)g、推定 85 両:5.3 斤(1 斤 244.7g)である(第 7 図 8)。原三国時代前期中葉で最大の龍田里遺跡の大型鍛造鉄斧(全長 16.5㎝:7 寸、重量 1161.5g:76 両、推定 1170g)と比較しても、一回り以上法量が大きく、重量がある。

この墳墓の二つ目の特徴は、量器の副葬である。器高 16.8、口径 10.8、底部外径 9.2㎝、断面が極薄い円筒形土器である(第 7 図 8)。この器種は、銅器・漆器の量器としての代用品として、使用された可能性が高い。茶戸里 1 号墳でも、本事例と底部が同一規格の漆製円筒形量器が出土している[11]。また、これらの法量を大きく上回る円筒形土器、推定器高 28.6㎝、底部外径 7.8㎝が同時期の茶戸里 54 号墳[12]にもみられる。

そこで推測の域を出ないが、上記した量器の法量について若干の検討を試みると、5 升の可



第6図. 原三国前期中葉～終末 洛東江流域・琴湖江流域 大型農具(タビ)



第7図. 前期後葉2の墳墓と副葬品(1) 7:校洞10号墳, 8 : 校洞18号墳

能性がある。前漢の1升は199.13cc(銅器)とされる。実測図の断面内法を平均して測ると、992.16cc≒992cc・5升(1升198.4cc)となり、銅器・5升=999.65ccとの誤差は−0.4%である。この瓦質量器と茶戸里1号墳の漆器製量器の底部径は一致しているため、同一法量の可能性がある。何れの量器も内面に等分する目盛線が認められないため、一杯五升等として測られたとみられる。

校洞18号墳の時期は、巾着形壺C類と短頸壺A2類の土器型式から、校洞10号墳と同時期(B.C30〜10)頃であろう。

(2) 鉄器所有と職能分化

慶州隍城洞遺跡の墳墓群の大半は、紀元後A.D.1世紀の原三国時代中期に位置づけられるため、ここでは、原三国時代前期後半2期の朝陽洞11号墳と同時期の隍城洞江辺路3号墳[13]に着目する。江辺路3号墳の武器類は、青銅製把頭飾と鉄剣のセット、及び鉄剣・鉄矛各1点であり、武器類の副葬も少なくない。また、鉄器は板状鉄斧を除いて、鋳造鉄斧2点・鍛造鉄斧大中小各1点、木材加工用として、鑿・鉇各1点がセットで具備され、A-2 ランクである(第8図9)。即ち、被葬者は木工生産に携わる集団のリーダー格である可能性がある。因みに、鋳造鉄斧は辰韓特有のCd類である。

一方、校洞21号・同9号墳は、鉄器副葬A-2ランクの江辺路 3 号墳の鉄器組成と比較して、大型鉄器の副葬点数が少ない組成(B-1 ランク)であるが、両者共に板状鉄斧各1点の副葬が認められる。校洞9号墳の把手附長胴壺B類(第9図11)の土器型式は、やや古式である。また、小型鍛造鉄斧・鎌各1点と小型鉄器の副葬も共通しており鉄器副葬 B-1 ランク(第 8 図10・第9図11)である。江辺路3号墳と校洞21号墳の巾着形壺 C2 類には、若干の地域差もみられるが同時期である。B-1 ランクに位置づけられる両被葬者であり、板状鉄斧の副葬点数が少ないことは特異である。しかし、この傾向は次項で述べる校洞1号墳では更に顕在化する。

校洞20号墳は、江辺路3号墳と同様、鉄器副葬ではA-2 ランクであるが、板状鉄斧の副葬はみられない。武器は鉄矛2点・鉄剣1点、鋳造鉄斧2点・鍛造鉄斧1点、木工具では鑿2点・鉇1点である(第9図12)。このように、木工具がセットで具備されているため、江辺路3号墳と同様に、被葬者は木工集団のリーダー格の可能性がある。

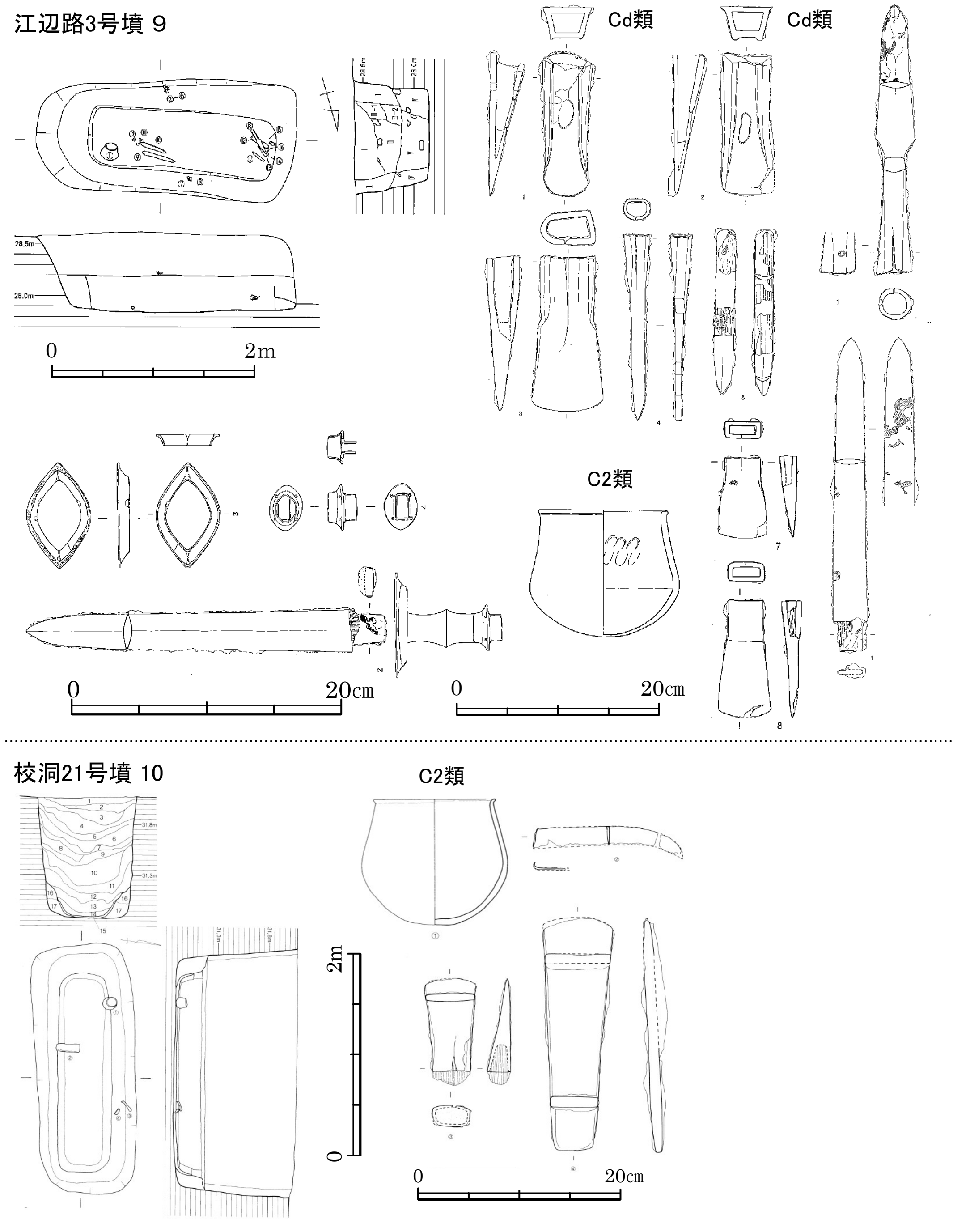
上記した通り、A-2 ランクで木工集団に関係する江辺路3号墳にも、板状鉄斧は副葬されていないため、校洞 20 号墳にも板状鉄斧副葬が認められないことは、偶然ではないといえる。一方、板状鉄斧が単独副葬で、小型鉄器が副葬されない B-1 ランクでは、八達洞28号、A-3 ランク林堂A-Ⅰ地区91号墳がある(表2)。

では、何故木工集団リーダー格とみられる墳墓に板状鉄斧副葬が認められないのか。理由としては、木工部門での職能分化の可能性が指摘できる。これらの板状鉄斧を所有する被葬者には、小型鍛造鉄斧を副葬する2例はあるが、木材加工に必要な鉇・鑿の副葬は1点も行われていない。

つまり、上記した B-1 ランク3基と A-3 ランク1墳墓の被葬者は、単純化すれば、木材伐採を行う集団でA-2 ランクの被葬者は、製材・加工に従事するという、二つの職能集団に分業していた可能性が考えられる。当然、両者は木工関連の組織と推定されるが、実際の鉄器副葬場面からは、職能による役割分担を読み取ることが可能といえる。

4. 板状鉄斧の所有形態

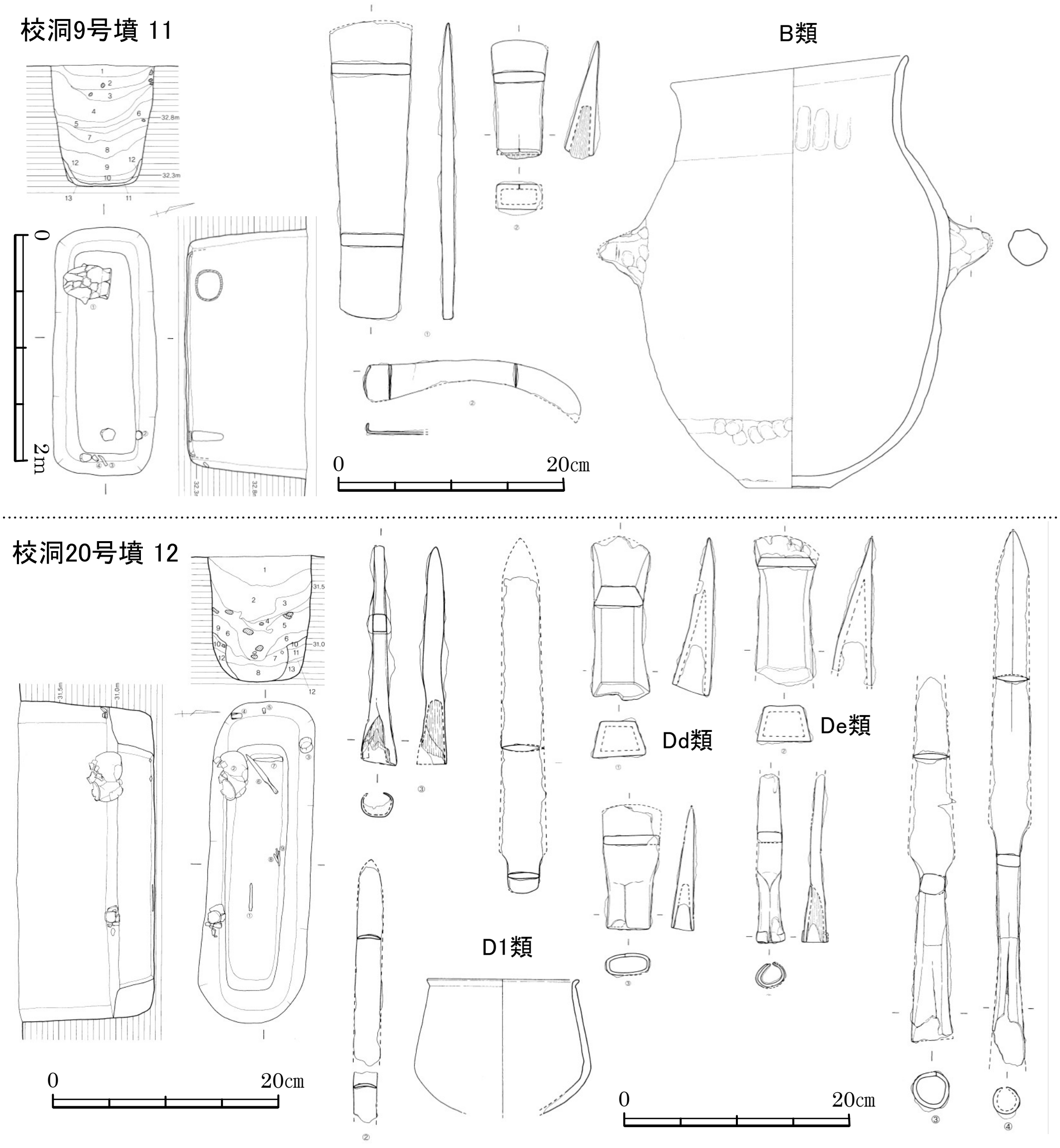
鉄器所有について、実用具であると同時に交換財として付加価値をもつ、板状鉄斧副葬の実態を弁韓の①校洞②茶戸里、辰韓の③八達洞



第8図. 前期後葉2の墳墓と副葬品(2)　9:江辺路3号墳, 10：校洞21号墳

④林堂　⑤朝陽洞墳墓群の５つの墳墓群について比較する。目的は、大型鉄器の代表格である板状鉄斧の所有形態には、時期差だけではなく墳墓群による威信財・蓄財、及び職能と関係する差異が認められるからである。更に、大型鉄器の所有状況は、原三国時代前期後半の鉄器生産地域とも関係すると考えられる。

弁韓①校洞墳墓群で板状鉄斧が副葬された墳



第9図 前期後葉2の墳墓と副葬品(3) 11:校洞9号墳, 12：校洞20号墳

墓は、鉄器副葬 16 基のうち半数の 8 基(50%)を占め、A-2 ランク 3 基(2~1 点)・A-3 ランク 1 基(2 点)、B-1 ランク 4 基(各 1 点)の併せて 10 点である（表 3)。また、②茶戸里墳墓群で板状鉄斧が副葬された墳墓は、鉄器副葬 41 基のうち、時期が特定できる墳墓 6 基、A-1 ランク(2 基)･A-2 ランク(1 基)･A-3ランク(3 基)、及び進展報告では時期が判らない B-1 ランク

表2　辰韓：八達洞・林堂・朝陽洞墳墓群 板状鉄斧副葬墳墓

遺跡名称	大型鉄器	小型鉄器	墳墓	年代	ランク	規模　墓壙 木棺
八達洞100号墳	鍛造鉄斧・板状鉄斧各1点	矛1点・短剣2点・鍛造鉄斧1点(青銅矛2点・短剣・把頭飾各1点)	木棺墓	BC.1世紀前葉	(A－3)	360×145
八達洞90号墳	矛・板状鉄斧各1点	短剣1点・鉄片2点 (銅矛・銅矛各1点)	積石木棺墓	BC.1世紀前葉	(A－3)	270×90
八達洞31号墳	鋳造鉄斧2点・板状鉄斧・矛各1点	短剣・刀子・鍛造鉄斧・鑿各1点	木棺墓	BC.1世紀中頃	A－2	234×103
八達洞28号墳	板状鉄斧1点	無し	木棺墓	BC.1世紀後葉	B－1	257×120
八達洞102号墳	板状鉄斧1点	鍛造鉄斧・刀子・鎌各1点	木棺墓	AD.1世紀前半	B－1	310×121
林堂A-Ⅰ-11号墳	板状鉄斧3点・鋳造鉄斧2点	矛・鉄剣・鋳造鉄斧・鎌各1点	木棺墓	BC.1世紀後葉	A－2	210×50
林堂A-Ⅰ-74号墳	板状鉄斧16点	鉄剣・刀子・矛・鎌各1点・鍛造鉄斧4点・鑿2点	木棺墓	BC.1世紀末～AD.1世初頭	A－1	197×70
林堂A-Ⅰ-89号墳	板状鉄斧5点・鍛造鉄斧1点	板状鉄斧・鍛造鉄各1点	木棺墓	BC.1世紀後葉	A－2	207×71
林堂A-Ⅰ-91号墳	板状鉄斧2点	無	木棺墓	BC.1世紀後葉	A－3	194×65
林堂A-Ⅰ-96号墳	板状鉄斧3点、タビ1点	鉄剣・鍛造鉄斧・鉋・鑿・鎌各1点	木棺墓	BC.1世紀後半	A－2	230×78
林堂A-Ⅰ-137号墳	鉄剣1点・板状鉄斧10点	鑿1点	木棺墓	BC.1世紀後半	A－1	196×72
林堂A-Ⅰ-139号墳	板状鉄斧15点・鋳造鉄斧1点	鋳造鉄斧2点	木棺墓	BC.1世紀後葉	A－1	205×93
林堂A-Ⅰ-147号墳	板状鉄斧1点	鍛造鉄斧1点・鑿2	木棺墓	BC.1世紀後葉	B－1	220×71
林堂A-Ⅰ-88号墳	板状鉄斧4点	鉄剣1点	木棺墓	AD.1世紀前半	B－2	221×67
朝陽洞5号墳	鋳造鉄斧2点・板状鉄斧1点	矛2点・戈・短剣・環状刀子・鎌各1点(青銅製馬鐸2点)	積石木棺墓	BC.1世紀前葉	(A－2)	205×75～80
朝陽洞38号墳	板状鉄斧8点・鋳造鉄斧2点・鍛造鉄斧2点	鍛造鉄斧・鑿・鉋・刀子・鎌各1点(前漢鏡4面・青銅剣把頭飾・同剣把盤部金具・銅環各1点)	木棺墓	BC.1世紀後半	A－1	258×128 190×65
朝陽洞11号墳	矛1点・鋳造鉄斧5点・板状鉄斧1点	矛・鍛造鉄斧・鉋・鑿各1点・鎌3点	木棺墓	BC.1世紀後葉	A－2	205×45～51
朝陽洞52号墳	板状鉄斧2点	鍛造鉄斧2点・矛・鑿各1点	木棺墓	BC.1世紀末～AD.1世初頭	A－3	260×94 200×45

(1 基)、盗掘のため鉄器副葬の詳細不明 1 基の計 8 基である（表 3)。したがって、板状鉄斧の副葬割合は 19.5%で、併せて 31 点と詳細不明(3 点)である。

このように、茶戸里墳墓群の板状鉄斧副葬率(19.5%)は、校洞墳墓群の 50%と比較して 1/2 以下であり、副葬の割合が低い。校洞墳墓群では、茶戸里墳墓群とは異なり、B ランク墳墓と A ランク墳墓の板状鉄斧副葬割合は半数である。一方、茶戸里墳墓群では A ランクが板状鉄斧所有の大半を占めることが大きな特徴である。特に、A-1 ランクの茶戸里 1 号(14 点)と同 6 号墳(8 点)のように集中して板状鉄斧が副葬される。即ち、板状鉄斧副葬において、両墳墓群を比較すると、茶戸里墳墓群と異なり、校洞墳墓群には、その集中副葬が一切認められないという差異がある。

次に、辰韓③八達洞墳墓群で板状鉄斧が副葬された墳墓は、鉄器副葬 36 基のうち 5 基であり、原三国時代前期では 4 基(4 点)である。八達洞墳墓群は、辰韓地域で最も古式段階である原三国時代前期初頭(紀元前 2 世紀末)に、鉄器副葬が開始されることが特徴である。原三国時代成立期の墳墓に副葬された大型鉄器は、破砕鋳造鉄斧が主体であった。八達洞墳墓群は前期前葉には、大型鉄器として板状鉄斧と小型鍛造鉄斧の鉄器複合組成が始まる最も早い段階の墳墓である[14]。

しかし、八達洞 100 号・同 90 号墳を嚆矢として、相次いで副葬された板状鉄斧は、原三国時代前期中葉には激減する。この傾向は、原三国時代前期後半にも継続し、併せて 2 基(2 点)のみである（表 3)。八達洞墳墓群では、前期中葉～後葉に鉄器が副葬された墳墓 20 基に対して、A-3 ランク墳墓は 1 基、B-1 ランク(6 基)、B-2 ランク(13 基)である。このように、大型鉄器の副葬数が激減し、原三国時代前期後半では、それ自体副葬されない B-2 ランク墳墓が 65%を占める状態となる。即ち、前期後半に八達洞墳墓群では、小型鉄器のみを副葬する B-2 ランク墳墓が一気に顕在化することを指摘できる。

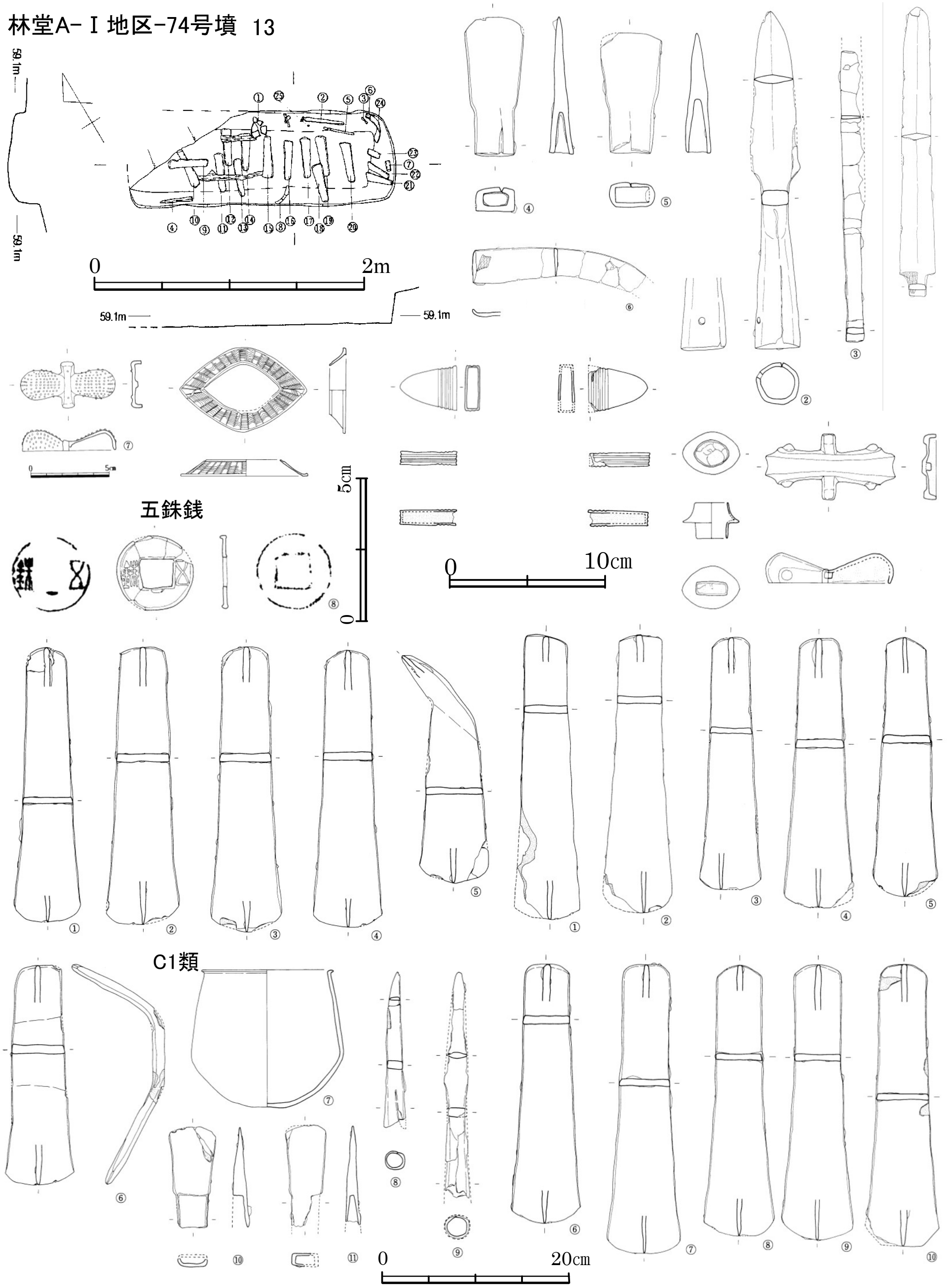
また、④辰韓の慶山林堂 A-Ⅰ・Ⅱ地区墳墓群で、鉄器が副葬され時期が特定できる墳墓は 25 基である。このうち、板状鉄斧の副葬された墳墓は 9 基(36%)、原三国時代前期後半は 20 基のうち 8 基(40%)である。内訳は A-1 ランク(3 基)、A-2 ランク(2 基)、A-3 ランク(3 基)、B-1 ランク(1 基)。林堂 A-Ⅰ・Ⅱ地区墳墓群の板状鉄斧副葬割合は、校洞墳墓群に次ぐ高い比率であり、かつ全体で 55 点と最も多い(表 2)。

林堂墳墓群では板状鉄斧の副葬の特徴は、1 基の墳墓に集中して副葬される点であり、5 点以上の墳墓が 4 基を占め、副葬数 55 点のうち 46 点(84%)である。特に前期終末の林堂 A-1-74 号(16 点)・林堂 A-1-137 号(10 点)・林堂 A-1-139 号墳(15 点)では、それぞれ板状鉄斧が棺床の如く敷き並べられることから、この時期には大型鉄器の独占所有が顕在化し、板状鉄斧が織布と同様に交易品として価値をもち、被葬者の財力を示していたことを指摘できる(第 10 図 13)。これらの墳墓の板状鉄斧の副葬点数は、弁韓茶戸里 1 号墳(14 点)、同 6 号墳(8 点)よりも、上回る集中所有である。

次に、⑤辰韓朝陽洞墳墓群のうち原三国時代前期で鉄器が副葬された墳墓は 6 基である。このうち、4 基の墳墓に板状鉄斧の副葬(表 2)がみられる。前期前葉 A-2 ランク(1 基,1 点)、前期後半 A-1 ランク(8 点)、A-2 ランク(1 点)、A-3 ランク(1 点)各 1 基である。この墳墓群では原三国時代前期の墳墓が僅少であり、上記したほかの 4 つの墳墓群とは直接比較できない。しかし、茶戸里墓群と同様に、A-1 ランクに集中所有が認められ、ほぼ大型鉄器副葬ランクと板状鉄斧副葬の相関関係を指摘できる一方、特に職能との関連はみられない。

表3. 弁韓:校洞・茶戸里墳墓群 板状鉄斧副葬墳墓

遺跡名称	大型鉄器	小型鉄器	墳墓	年代	ランク	規模 墓壙 木棺
校洞3号墳	板状鉄斧1点	鉄剣・鍛造鉄斧・細鎌・金具各1点(前漢鏡1面)	木棺墓	BC.1世紀中頃	B－1	256×89 212×64
校洞13号墳	矛・板状鉄斧・鋳造鉄斧各1点	鍛造鉄斧・鉋・細鎌各1点(青銅銅剣・把頭飾・盤部各1点)	木棺墓	BC.1世紀後半	A－2	243～226 ×76～67 177×45
校洞10号墳	矛2点・板状鉄斧2点・鍛造鉄斧1点	矛・鉄剣・戈・板状鉄器・鉋・鑿・細鎌各1点	木棺墓	BC.1世紀後葉	A－2	239～232 ×104～74 203～194 ×72～55
校洞9号墳	板状鉄斧1点	鍛造鉄斧1・鎌点	木棺墓	BC.1世紀後葉	B－1	217～192 ×87～62 180～172 ×62～43
校洞11号墳	矛・板状鉄斧各1点・鋳造鉄斧2点	鉄剣・鍛造鉄斧・細鎌各1点	木棺墓	BC.1世紀後葉	A－2	231～214 ×93～72 209～187 ×63～41
校洞1号墳	板状鉄斧2点	鍛造鉄斧・刀子各1点	木棺墓	BC.1世紀末～AD.1世紀初頭	A－3	209～193 ×81～65 170～156 ×68～38
校洞19号墳	板状鉄斧1点	無	木棺墓	BC.1世紀後葉	B－1	194～185 ×85～66 168～155 ×55～41
校洞21号墳	板状鉄斧1点	鍛造鉄斧・細鎌各1点	木棺墓	BC.1世紀後葉	B－1	243～225 ×97～74 184～171 ×56～37
茶戸里18号墳	矛・板状鉄斧各1点	矛・鉄剣・鍛造鉄斧各1点	木棺墓	BC.1世紀前半	A－3	212×100
茶戸里1号墳	矛4点・戈1点・板状鉄斧14点・鋳造鉄斧6点・タビ2点	鍛造鉄斧・環頭刀子各1点・鉄剣2点・前漢鏡1面・帯鉤・鋸歯紋銅環・(小銅鐸・銅環)各1点	木棺墓	BC.1世紀中頃	A－1	278×136 240×85
茶戸里6号墳	板状鉄斧8点・鋳造鉄斧	矛4点・鉄剣1点(把頭飾金具附銅剣1点)	木棺墓	BC.1世紀中頃	A－1	260×125 180×80
茶戸里10号墳	板状鉄斧3点	鉄剣・鍛造鉄斧各1点	木棺墓	BC.1世紀後葉	A－3	270×105 190×50
茶戸里23号墳	板状鉄斧2点・タビ1点	鍛造鉄斧・鑿・螺旋状錐各1点	木棺墓	BC.1世紀末～AD.1世紀初頭	A－3	237×115 200×(62)
茶戸里40号墳	矛1点・板状鉄斧3点・鋳造鉄斧2点	鉄剣・鍛造鉄斧・鑿・細鎌各1点	木棺墓	AD.1世紀前葉	A－2	223×105



第10図 前期 終末墳墓と副葬品　13:林堂遺跡A-Ⅰ地区-74号墳

以上、簡略に板状鉄斧副葬からみた大型鉄器所有について、５墳墓群を比較して概観した。その結果、弁韓の校洞墳墓群は、板状鉄斧に関し最も実用具として、職能と生産実態に近い在り方を示したといえる。また、茶戸里墓群では、大型鉄器副葬 A ランク墳墓と板状鉄斧の所有が一致する。

そして、弁韓の校洞墳墓群の対極が辰韓の林堂墳墓群であり、蓄財を目的とする板状鉄斧の集中所有が認められる。また、八達洞墳墓群では、原三国時代前期後半に大型鉄器を１点、或いは副葬しない B ランク墳墓が急増し、時代が降ると逆に、大型鉄器所有が減少・衰退している。

まとめ

前期中葉には、辰韓独自形式をもつ鋳造鉄斧の多様化が認められ、鍛造系鉄斧類も多様化することから、原三国時代前期中葉には、本格的鉄器化社会への基礎が成立したと考えられる。

また、原三国時代前期後半には、鉄製品と同様に織布が交易品として重要であったと考えられ、嶺南地域では紡織技術専業化の萌芽期として位置づけることができる。織布交易によって、前漢鏡に象徴される富を蓄積していたとみられる。さらに、大型鉄器の特化と鋳造鉄斧の多様化、及び地域差が現れ、弁韓にも独自の鋳造鉄斧が成立した。

原三国時代前期中葉に成立した大型農具のタビには、当初から地域差が認められ、鍛造系鉄器生産集団による差異が顕在化したことが考えられる。そして、前期後葉には副葬された鉄器組成から、被葬者の職能との関係をみることもできる。また、板状鉄斧の副葬には、性格の差異が認められ、板状鉄斧を棺床の如く敷並べる墳墓群の出現は、板状鉄斧の財力・蓄財としての象徴的性格を端的に示すものと考え、実用品から、蓄財及び富の象徴へと変化したことが推定できる。

原三国時代前期初頭から辰韓では鉄器の副葬が始まるが、中葉になると弁韓で多数副葬される。しかし、後葉では弁韓よりも辰韓でより多くなるという興味深い状況が認められる。

鉄器の副葬のみからではあるが、原三国時代前期後半において、交易の中心地や鉄器生産拠点の移動、或いはその拡大という画期が存在したことが考えられる。即ち、前期初頭の辰韓から中葉では弁韓、そして、再び後葉では辰韓へと中心地の移動を推定することができる。この生産・交易システムの背景には、必要条件として三国時代以前に度量衡の整備が指摘できよう。

その後の原三国時代中・後期をはじめ、さらに三国時代の両地域の地域間の差異と拮抗へ繋がる構図を、既に原三国時代前期後葉の様相から描くことが可能であるといえる。

なお、本稿は故坂野和信「原三国時代前期の度量衡の成立（Ⅱ）」2012 年の一部について坂野千登勢が検討し、再構成したものである。

謝辞　東国大学校 安在晧教授と東亜細亜文化財研究院 辛勇旻元理事長、及び同研究院 裵徳煥院長　崔景圭団長にお世話になりました。また、日本国内では、埼玉大学 中村大介准教授には、多大な支援を頂いたことを記して、御礼申し上げます。

註

1 A 坂野和信 他 2015,「初期辰韓社会における鉄器受容と度量衡」,『埼玉大学紀要　教養学部』第 50 巻第 2 号

B 同 2015,「原三国時代前期の鉄器と度量衡」,『埼玉大学紀要　教養学部』第 51 巻第 1 号

C 同 2016,「原三国時代前期辰韓の鉄器と対外交渉」,『埼玉大学紀要　教養学部』第 51 巻第 2 号

2 後藤直 2009, 「弥生時代の倭・韓交渉」,『国立歴史民俗博物館研究報告』第 151 集,国立歴史民俗博物館

3 註 1C に同じ

4 A 岡村秀典 1984,「前漢鏡の編年と比較」『史林』史学研究会　67 巻第 5 号

同 B1999,『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館。3 期漢鏡の大半は「銘帯鏡Ⅲ式」であり、玄界灘沿岸部の北部九州の甕棺墓に最も多く副葬され、弥生時代中期後半(B.C.1 世紀第 2 四半期)に位置づけられるものである。

5 郭鐘喆他 2004,『密陽校洞遺跡』,学術調査報告 第 7 冊, 密陽大学校博物館

6 高久健二 1999,「楽浪古墳出土の銅鏡」,『歴史考古学志』,第十五輯,東亜大学校博物館　古段階Ⅱ期である

7 佐原真 1979, 「手から道具へ　石から鉄へ」『図説日本文化の歴史』1 小学館

8 坂野千登勢 2010,「日韓紡錘車の基礎研究」,『東亜文化』第 8 号,東亜細亜文化財研究院,　原三国時代前期終末～中期初頭は、A.D.50 年頃としている。

9 註 1C に同じ

10 註 1C に同じ

11 註 1B に同じ

12 李健茂　他 1995,「義昌 茶戸里遺跡発掘進展報告(Ⅳ)」,『考古学誌』第 7 輯, 国立中央博物館

13 韓国文化財保護財団 2003,『隍城洞遺跡Ⅰ』学術調査報告 第 141 冊

14 註 1A に同じ

参考文献

藤田亮作 1925 他,「南朝鮮に於ける漢代の遺跡」,『大正十一年度古蹟調査報告第二冊』,朝鮮古文化 綜鑑 第 1 巻, 養徳社

于省吾 1957, 96 葉,538 器『商周金文録遺』,科学出版社

金延鶴編 1972,『韓国の考古学』,河出書房新社

朝鮮民主主義共和国 社会科学院考古学研究所 田野工作隊 1978,p25『考古学資料輯』第 5 輯,科学百科事典出版社

邱隆・丘光明他 1981,『中国古代度量衡図輯』中国国家統計局、文物出版社

尹容鎮 1981,「韓国青銅器文化研究-大邱坪里洞出土一括遺物検討」,『韓国考古学報 10・11』,韓国考研究会

李健茂 他 1998,『慶山 林堂遺跡(Ⅰ)-A～B 地区 古墳群』,学術調査報告 第 5 冊,韓国文化財保護財団

村上恭通 1999,『倭人と鉄の考古学』,青木書店

岡村秀典 1999,『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館

高久健二 1999,「楽浪古墳出土の銅鏡」,『考古歴史学志』,第十五輯,東亜大学校博物館

丘光明 2000,「中国古代度量衡」,『計量史研究』22 日本計量史学会

『日本考古学事典』2003, 「度量衡」, 三省堂

卲国田 主編 2004,『敖漢文物精華』内蒙古文化出版社

後藤直 2006,『朝鮮半島初期農耕社会の研究』,同成社

李陽珠 他 2007,『永川 龍田里遺跡』学術調査報告 第 19 冊, 国立慶州博物館

坂野和信 2007,『古墳時代の土器と社会構造』,雄山閣

江浦洋 他 2007,『計る・測る・計る－度量の歴史展－』,図録 36,大阪府立弥生文化博物館

李健茂 2008,「茶戸里遺跡発掘の意義」,『葦原の中の国 茶戸里』国立中央博物館

李東冠 他 2008,「弥生・古墳時代の日韓鉄製農具研究」,『日・韓交流の考古学』第 8 回 合同考古学大会,嶺南考古学会・九州考古学会

武末純一 2009,「茶戸里遺跡と日本」,『茶戸里遺跡 発掘成果と課題』昌原茶戸里遺跡発掘 20 周年国際学術交流会議,国立中央博物館